

〔論文〕

# 年間を通したインターンシップの教育的効果 —現状と課題—

大嶋 健吾・芝田圭一郎  
玉川 朝子・中津功一郎

## 【要旨】

本研究の目的は、インターンシップでの経験が及ぼす教育的な効果を検討・分析することである。本学は、週に1日、年間を通してインターンシップを実施している数少ない保育者養成施設である。同様の形式を導入しているのは大阪総合保育大学であるため、先行研究として比較できる論稿<sup>1</sup>は少ない。そこでインターンシップの取り組みについて整理した上で、学生へのアンケート調査、インタビュー調査を実施した。これまでのインターンシップでの授業を精査することで日誌によって個別の学びはあっても、集団での共有機会がないため、年間スケジュールの見直しを行い、見直しをもった授業進行・展開が必要であることが分かった。また、アンケート調査・インタビューを基に考察すると、学生の実感としてインターン実施・未実施学生で学習意欲についての差異はそれほど見られなかった。学生が何を期待してインターンシップや実習に臨んでいるかさらに調査し、学びの場を提供することが急務である。今後、アンケートの再考・実施することで学生の本意をさらに探っていきたい。また、学生自身の成長実感や学びの過程をどのように可視化していくかも課題である。

## I はじめに

保育者養成校である大阪城南女子短期大学（以下、「本学」）では、7年前より長期インターンシップ実習（以下、「インターンシップ」と記載する）を開始し、学生が保育・教育現場での実体験を通し、より高い専門知識や技術を身につけ、実践力を養う機会としている。本研究は、インターンシップでの取り組みに関する現状の一部を整理するとともに、学生へのアンケート調査を基にインターンシップ経験が及ぼす教育的な効果を検討・分析するものである。ここでいう教育的効果とは、インターンシップ実施中の学生の変容を明らかにするものであり、インターンシップ全期間終了後ではなく、インターンシップ実施中の意識調査を継続的に行い、さらにインターンシップ経験の中での学びがその後の実習や授業等にどのように効果をもたらしているのかを分析しようとするものである。

保育者養成校に通う学生にとって現場において「先生」という存在を実際に目の当たりにする経験は、知識や技術はもちろんのこと、素養面や保育観等において大きな影響を与える。それは卒業

後の進路選択や学生にとっての理想とする保育者像にも同様に、何らかの影響を及ぼすことは容易に想像できる。資格取得のための「実習」に加えて、「インターンシップ」の経験があるからこそ、よりその教育的効果がみられるものであるのではないかと考える。本学のインターンシップ制度は、3日や1週間という短期間での実施ではなく、週に1回の頻度で年間20日間のインターンシップを実施している。また1・2年生のいずれも学生へインターンシップ履修の希望調査を行い、実施している。学生にとって、インターンシップの経験がどのような教育的効果をもたらしているか、現場での実践の際に学生自身が意識をすることは難しいものである。学生自身も無意識の中で、意識的に行って学んでいることもあるのではないか。そこで、1年生の教育実習・施設実習終了後に1・2年生同時にアンケート調査を実施し、その結果を基にインターンシップを履修している学生と履修していない学生にとって、様々な面でどのような違いが見られるのか、またどのような教育的効果がみられるかを検討し、より効果的な学習支援のあり方を検討していくこととする。

保育者養成校におけるインターンシップを通じた先行研究は数多く見られる。インターンシップ実習の効果と課題では、インターンシップ後の保育実習への意欲が向上する効果や保育者としての職業意識を高める効果を明らかにしている<sup>2</sup>。インターンシップ実習が学生に及ぼす意識変容では、学生の聞き取り調査により学生の振り返り指導を行う中で、意識変化の過程を追いかけた結果、子どもの発達理解や保育職に対する職業適性という点での変化が見られたとある<sup>3</sup>。そうした中、平井(2020)<sup>4</sup>らは、インターンシップを実施した成果として①保育・教育実習や仕事に対しての心構えや意欲をもつ機会になった②学生自身が保育・教育実習に向けての課題を明確に持つことが出来るようになった③インターンシップで学生が学べることと、学びにくいことが整理できたと挙げている。学生にとってインターンシップでの経験が何らかの意識変化や成果がみられることは明らかだが、いずれもインターンシップの実施日数や期間にはばらつきがある。そこで、本稿では本学でのインターンシップの実施状況を整理し、実習前後のアンケートと照らし合わせることで、インターンシップの授業を含めた経験値が学生の学習意欲を高めているかまたどの部分で意欲が向上し、インターンシップを履修していない学生との差異は見られるのかを検討していきたい。

## Ⅱ 先行研究

本学のように週に1日、年間を通してインターンシップを実施している保育者養成施設は極めて少ない。同様の形式を導入しているのは大阪総合保育大学であるため、先行研究として比較できる論稿は少ない。しかし、学外実習における保育現場での経験が保育者養成に多大なる影響を及ぼすことは周知の事実である。つまり、保育現場での実践的な学びは教育的効果があることは勿論のこと、その教育的効果の向上は保育者養成においての恒久的な課題ともいえる。そういった観点からも本論文は保育者養成における学外実習とは違った保育現場での経験を学びに変える方法を探るといった面も含んでいる。インターンシップでの経験が教育的効果を与え、学生の成長を促していること

は間違いないが、具体的な教育的効果や学生自身がその成長を実感できているかどうかを探っていくことも必要である。また2020年から蔓延している新型コロナウイルス感染症によってこのインターンシップも大きな影響を受け、変化をしてきた。これまでの継続した取り組みとコロナ渦終息後の取り組みへの展開を模索するといったことも必要としている。

筆者ら（2021）<sup>5</sup>はインターンシップにおいて各学生の経験値を学生間において共有することが及ぼす「学外実習」「保育者」に対する意欲向上への影響力を探ってきた。その影響力を今回のアンケート調査から探っていく。

### Ⅲ これまでのインターンシップの取り組み

#### 1 インターンシップ初年度～2019年度まで

本学では2015年度より、独自科目としてインターンシップを開講している。インターンシップを独自科目として開講した背景には、保育者養成カリキュラムにおける「実践教育の徹底」を教育目標と設定したからである。保育者を養成する課程で学外実習は必ず設定され、学生は必ず履修しなければならない。教育実習（幼稚園）と保育実習（保育所・福祉施設）の学外実習の時間に実際の保育現場で培われる経験は保育者になるための学びとして貴重な機会である。しかし、学外実習の時間は限られたものであり、本学では概ね400時間程度であった。そこで本学では通常の学外実習の時間以上に保育現場での実践経験を積むことができるように独自科目としてインターンシップを開講している。初年度は選択科目として設定し、12名の学生が履修していた。週に1日、毎週水曜日の午前中にのみ附属の城南学園幼稚園に学生が赴き、通常の学外実習と同様に参加実習の形式で幼児クラスに配属され、子ども達と関わり、また幼稚園教諭と共に保育業務にあたった。インターンシップの終了後、他の授業があるため、短大に戻り、それぞれの授業に出席する。帰宅後に各自がインターンシップで経験したことをA4一枚のレポートにまとめ、短大の担当教員に報告した。このような形で前期7回、後期4回のインターンシップを実施した。初年度である2015年度では履修した学生も少なく、学生評価としてのデータも薄いものであるが、概ね学生の学びは深く、教育的効果は高かったと思われる。しかし、具体的な教育的効果や科目としての体裁が不十分であることが露見されたので次年度から大きく変化させることとなった。

2016年度入学生よりインターンシップを大阪城南女子短期大学の基幹科目として設定できるように科目として再整理することとした。まず選択科目であったが卒業選択必修科目に変え、インターンシップと表現関連科目（音楽表現、造形表現など）のどちらかを選択で履修するようにカリキュラムを変えた。これによりインターンシップを履修する学生は増え、125名中71名（約57%）が履修した。また午前中だけであったインターンシップの時間を延ばし、8時から15時までの約7時間、保育に参加し、また依頼園を附属の園だけではなく、私立幼稚園・保育園・認定こども園・障がい児関連施設・乳児院に拡充した。前年度では年間を通して附属園に赴いたものの、日程（回数）が少なくなっ

ている。(特に後期は学外実習の兼ね合いで日数が減少してしまった)そこで前期・後期ともに10日間を確保できるように年間カリキュラムを調整し、同様に水曜日をインターンシップに集中できるよう時間割も調整した。そのため水曜日はインターンシップを履修している学生は短大で授業は受けずに、各園でインターンシップ実施後は、帰宅し日誌(振り返り)を記入するという学外実習と同様の形となる。日誌の様式はA4用紙1枚にインターンシップを実施した日の保育内容を時系列に沿って記録するものである。概ね、学外実習にて使用されているものと変わらない。しかし学外実習とは異なり、学生が記述した日誌は本学の教員が添削を行っている。本来の学外実習では学生を担当している保育者が日誌の添削を実施し、その後実習生である学生に返却することで学生が日誌や担当者のコメントを通して振り返りを行っている。だが、このインターンシップは週に1日しか保育現場に赴かないため、日誌のやり取りに時間がかかり、学生のインターンシップの振り返りに即時性が生まれない。そのため、学生の振り返りに即時性をもたせ、教育的効果を高めるため、本学の教員がインターンシップの日誌を添削することにした。

インターンシップを受け入れる園側には日誌を本学の教員が添削することとその日誌の様式を伝えていたが、日誌の様式は学外実習のそれと大きく変わらない。またインターンシップの最中に学生が保育に参加する形式も学外実習と大きく変わらない。そのため学生を受け入れる園側からインターンシップと学外実習の違いに関しての問い合わせが多くあった。その疑問に関しては、学外実習は連続した期間の中での実践的な学びであるが、インターンシップは年間を通して同じ園、同じクラスに赴くことで子ども達の日々の成長や年間の保育業務の流れ、行事ごとのねらいや準備、そして担当する子ども達との信頼関係の構築など学外実習ではできないことを学生に学びと経験を積むことを目的としていることを説明した。

翌年の2017年度はインターンシップの実施内容として大筋の変更はなく開始し、履修する学生とインターンシップ受け入れ園が大幅に増加した。155名中115名(約74%)が履修し、受け入れ園も47園となった背景にインターンシップの浸透とインターンシップの口コミの拡大があると考えられる。やはり学外実習に加えての保育現場の経験が教育的効果を高めているからこそ重要であるという認識から、ニーズが高まったと思われる。しかし、この要因は推測でしかなく、具体的な調査を実施していなかったのも、課題でもあった。また初年度のインターンシップを履修した学生が卒業し、また拡充した学年も最終学年となったことでインターンシップが学生の進路(就職先)と繋がるケースが見受けられるようになった。これまではインターンシップの受け入れ園に本学の全教員が年に2回ほど、学外実習の実習訪問(巡回)と同様に訪れ、インターンシップに関して園側と協議を重ねていたが、当該年度からインターンシップ先が拡充したため、受け入れ園にインターンシップの説明会(懇談会)を実施することになり、その中でインターンシップの受け入れに関して具体的な詳細に説明することが可能となった。その中で受け入れ園からはどのような指導を学生が求めているのかという点が議題に挙がり、学外実習のように手遊びの実践、絵本や紙芝居などの読み聞かせを实践させ、子ども達の前に立つという経験が学生の学びに繋がり、教育的効果が高まることを

説明した。またインターンシップでは時間の関係上、担当する保育者と学生が学外実習のように時間をとって話し合う協議のような時間がなかったので、前期と後期にそれぞれ1～2回程度の協議の実施を依頼した。

2018年度になり、入学生が減少したが136名中104名（約76％）が履修し、インターンシップ受け入れ園は41園となった。履修する学生とインターンシップ受け入れ園は減少したが、割合としては変化がなかった。インターンシップ実施内容として週に1日の現場体験を年間を通して経験を積むことや日誌を記述し、本学の教員が添削するといった基本方針は変わらず実施された。2018年度のインターンシップではインターンシップの年間の目的に加えて時期に応じて細分化された目的を設定し、日誌に追加様式を加えることとなった。これまでインターンシップの通年の目的として以下の3点が設定された。

#### 【通年】

- ・インターンシップを通して現場の様々な課題を理解し、保育者の職務への基礎的な理解を深める
- ・年間を通し、保育者の子どもへの援助や関わりに触れることで経験を積み、今後に活かす
- ・継続した子どもとの関わりの中で、子どもの発達や成長過程を学ぶ

これは年間であるので学生の成長に合わせて細分化された目的が追加されることとなった。その背景に学外実習がある。年間を通してのインターンシップの間に学外実習に赴くことで、また一段と成長する学生の姿が見られ、また日誌を添削する教員からも学生の成長する様子が窺えるという意見もあり、一年間を4分割にして、目的を追加で設定することにした。以下がその細分化された目的である。

#### 【前期前半（4～5月）】

- ・保育現場の見学を通して、保育者の業務や子どもへの援助を知る
- ・保育の年間計画（行事など）を知る
- ・保育者と子どもとの信頼関係について知る

#### 【前期後半（6～7月）】

- ・子どもの前で手遊びの実践を行う
- ・子どもに絵本、紙芝居などのお話の読み聞かせを行う
- ・これまでの子どもの変化した点（成長した点）に気づき、日誌に記す

#### 【後期前半（10～11月）】

- ・保育者の職務内容や子どもへの援助に触れ、意図やねらいを考察する
- ・子どもの日々の活動から子どもの思いや考えを考察する
- ・日々のインターンシップに対してねらいをたて、エピソード記録をとる



【後期後半（12～1月）】

- ・ 保育者として求められる責任感や専門性を高める
- ・ 子どもと信頼関係を築き、共感する
- ・ 自分にとっての特技を見つけ、保育技術や援助技術を高める

この設定により、学生が年間を通したインターンシップの中で、現時点でのインターンシップの目的や自分の現状を考え直すきっかけとなり、各々で設定する個人のインターンシップのねらいを深く考えることに繋がっていたと思われる。また日誌の様式だが、前期は従来通りの時系列に沿った日誌の様式であったが、後期からエピソード記録の様式へと変化させた。学外実習では時系列に沿った日誌様式が主流であるが、実際の保育現場では1週間やひと月の記録はあったものの1日単位での日誌を記録することは少なく、近年ではエピソード記録を取り入れている保育現場が増えていく。また学外実習とインターンシップの違いを明確にすることも踏まえて、後期からエピソード記録を導入することにした。開始当初は時系列の日誌様式に慣れている学生が多く、困惑している学生も多かったが日に日にエピソード記録に慣れ、しっかりと保育場面をエピソードで捉えることができるようになっていった。このことから、ただ漠然とインターンシップを通して保育現場に赴くだけであったが、子どもを観る視点や保育者と子どものやりとりを観察する力が深まり、子ども理解や保育者の保育現場に対する理解へと繋がったと思われる。このエピソード記録の重要性等を説明することやインターンシップでの経験を学生間で共有することを目的として、インターンシップの期間中に授業（補講）を実施することにした。これまではインターンシップの始まりと終わり（前期開始時・前期末・後期開始時・後期末）に事前事後指導として授業を実施していたが、インターンシップの中盤時期に授業（補講）を前後期にそれぞれ一回ずつ設定し、上記のような内容で進めた。特にインターンシップの経験をグループワークを通して学生間で共有することは大きな効果があったように思われる。これまで授業進行では前後期末のそれぞれでしか、インターンシップの経験を共有することができなかった。年間を通して、学外実習以上の時間を保育現場で過ごしているにもかかわらず、この貴重な経験を自分のみで留めており、日誌についても本学の担当教員が添削するだけであり、共有することはなかった。この点を改善するためにも学生間で得たインターンシップでの経験を共有する場や時間を確保することがインターンシップ運用の課題となっていった。

2019年度のインターンシップの履修状況は148名中98名（約66％）が履修し、行き先件数は41園となり、履修する学生が減少した。実施内容に大きな変化はなかったものの、減少した。インターンシップという本学独自の科目が認知されるようになり、インターンシップを目的として入学する学生が大半を占めている中で、減少した背景には附属の高校の存在が大きい。2019年度に入学する学生の内、附属である城南学園高等学校から内部進学で入学する学生は多く、148名中50名（約33％）いる。そしてその50名中13名（約26％）しかインターンシップを履修していない。附属の高校以外から進学している学生がインターンシップを選択し履修する率は、98名中85名（約87％）で

あり、内部進学者との間に大きな違いが出るようになった。この原因として2017年度から城南学園高等学校でもインターンシップを導入し、内部進学や保育系の大学・短大に進学希望する高校生が授業の一つとして保育現場で保育活動に参加し、経験を積むことができるようになった。そのため、2019年度の内部進学者は既にインターンシップを経験して本学に入学している状況であり、既に経験しているがため、他の表現関連科目（音楽表現、造形表現など）を履修する傾向にあったと思われる。このため高校時のインターンシップとの差別化を図り、高校時のインターンシップとの違いを説明し理解に繋げることが課題となった。また前述した学生間で得たインターンシップでの経験を共有する場や時間を確保するという課題に対して日誌を見せあうといったグループワークを実施したが、大きな効果は期待できなかった。

## 2 2020年度～2021年度まで（新型コロナウイルス対策を中心に）

これまでインターンシップという科目は主に1年生が対象の科目であった。2年生は履修できないわけではなかったが時間割やカリキュラムの関係上、土曜日や夏季休暇などの授業日以外にインターンシップを実施していた。また2年生でのインターンシップを履修するにあたって、1年生でインターンシップに関する全ての科目の単位を修得していることが履修条件としていたため、2年生になってインターンシップを履修する学生は毎年5名もいない状況であった。そういった状況を打破するために、2年生も1年生と同様に週に1日、年間を通したインターンシップを実施できるように時間割及びカリキュラムを再編成することとなった。2年生でのインターンシップを履修するための前述した条件も破棄し、2020年度入学生からを対象として、インターンシップを1学年または2学年での好きな学年で履修することが可能となった。この履修に関する変更の背景には学生からの授業評価アンケートからの意見が起因している。2年生でも年間を通したインターンシップに参加したいという希望は一定数存在し、履修を希望していた学生は多かった。これにより、インターンシップの拡充と教育的効果の向上を図ったのだが、2020年度が開始される前に履修以外の面で大きな変更を余儀なくされる。

2020年度は新型コロナウイルスの猛威にさらされ、これまでのインターンシップとは大きく異なる形式となった。2020年4月から本来であれば前期の授業が開始されるところであったが、本学では入学式の翌日から休校し、インターンシップだけではなく、全ての授業の開始が大幅に遅れることとなった。2020年度のインターンシップの履修状況は130名中94名（約72%）が履修し、行き先件数は39園となり、受け入れる園が新型コロナウイルスの影響で減少した。これまでは4月中にインターンシップに赴くまでの準備やインターンシップ先での事前オリエンテーションがあったが、実施できる状況ではなかった。休校中は何も実施されず、5月に入り、オンライン授業が開始され、6月から学生を2分割にしての分散登校による対面での授業が再開された。6月までのオンライン授業ではインターンシップに赴く準備としての講義に加えて、保育現場を身近に感じることができるよう授業運営を実施した。6月の対面授業の再開により、この期間の授業ではインターンシッ

ブを再開・実施していくための整備を始めていく。まず、インターンシップを実施していくにあたって、これまで前期に週に1日、計10日間実施していたインターンシップを7月に連続した3日間に変更し、インターンシップ開始2週間前とインターンシップ期間中にアルバイトを含めた不要不急の外出の自粛を学生に課した。そして新型コロナウイルスの感染対策及び蔓延防止対策（マスクの着用や体調不良の報告など）に関する誓約書に署名を課し、学生の保護者にも署名を依頼した。そしてインターンシップ開始2週間前から、インターンシップ実施3日間、インターンシップ終了後2週間の検温を含めた健康管理表を記録し、その記録用紙をインターンシップ受け入れ園に提出する。ここまでの新型コロナウイルス対策を実施して、初めてインターンシップを受け入れることが可能であった。それ程までに、インターンシップ生を受け入れることが園側からすれば困難であり、学生にもその旨を指導していった。この新型コロナウイルス対策は今後のインターンシップだけではなく学外実習を含めた学外での活動の基本方針となっていく。この対策を講じた甲斐もあり、インターンシップ期間中に新型コロナウイルスに罹患した学生はいなかった。この3日間のインターンシップでは連続した3日間であったので日誌の添削を教員がすることができず、そのため日誌に変わるレポートをGoogle フォームにて提出・回収することにした。インターンシップ当日にあったエピソードや子どもとの関わり、保育者の援助などを設問とした。そのため従来の時系列に沿った日誌様式は導入せず、自己課題の設定やその課題に対する振り返りに重きを置くように指導した。

後期に入り、本学では分散登校を止め、9割の科目が対面授業に戻ることであった。そこで従来の形式である週に1日、計10日間のインターンシップに戻すことを模索したが、新型コロナウイルスの猛威を考慮すると不可能と判断した。しかし前期のような連続した3日間ではなく、週に1日のインターンシップを計3日間と計6日間の2種類の日程を用意し、受け入れ園側に理解を求めた。後期に本学の1年生は10月下旬から2週間の保育実習Ⅰ（施設）を実施している。その学外実習が終了してから、上記のような2種類のインターンシップの日程を学生に提示し、学生に選択するようにした。インターンシップの実施期間中は前述の新型コロナウイルス対策を継続するためアルバイトを含む不要不急の外出の自粛（本学での授業は不要不急の外出に当たらないと判断している）を学生に課すことにした。そのためインターンシップの期間中である一ヶ月間以上はアルバイトを自粛しなければならない。その影響もあってか、まずインターンシップから表現関連への科目に履修変更する学生が8名、ほとんどの学生が3日間のインターンシップを選択し、6日間のインターンシップを選択したのは30名（30/86 約35%）であった。これでは3日間と6日間のインターンシップを選択した学生の間に経験値としての差が生じ、また学習としての時間にも差が生じるため、その差を埋めるために「NAGARAチャンネル」というものを作成・実施した。インターンシップ終了後の18:00～19:00に、短大にてインターンシップの振り返りの授業を実施するのではなく、Skypeを使用して振り返りを実施するものである。インターンシップの履修学生に課題を課し、その内容を受けてインターンシップでの経験と振り返りを担当教員と共に実施し、学生それぞれの理解度を深めるとともに経験値を共有することを目的としている。また3日間しか実施していない学



生はこの「NAGARAチャンネル」に入室することを必須とし、インターンシップで得られることができなかった経験値を共有することで教育的効果を図った。この「NAGARAチャンネル」での効果や取り組みの詳細は先行研究である『コロナ禍における学生の保育現場経験値共有の取り組み』<sup>5</sup>を参照されたい。他にもインターンシップで学びたいことを可視化するために、学生自身が学びたいことを設定し、そのために必要な準備や学習、経験などを列挙するレポートをインターンシップ開始前に作成し、インターンシップ受け入れ園での学生自身の担当保育者に提出するようにした。これにより、担当保育者からの指導を明確にするとともに、学外実習とは違う視点からの学びを積み上げることが可能になった。

2021年度からは前述したように2年生も積極的に履修できるようになり、履修者数も変化した。インターンシップの履修者数は両学年合わせて、229名中124名（約54%）、内2年生の125名中52名（約42%）、1年生の104名中72名（約69%）が履修し、行き先件数は52園となった。前年度の後期から始めたインターンシップ当日の夜に実施していた当日の内容の振り返り、「NAGARAチャンネル」は継続することにした。先行研究<sup>5</sup>の通り、教育的効果が見られるためインターンシップの振り返りを実施するにあたっての柱と位置付けた。4月当初は従来通りの週に1日、年間（前後期）を通して20日間を保証する形式をとり、準備を進めた。年間を通してインターンシップを実施するにあたり、インターンシップ期間中のアルバイトを含めた不要不急の外出の自粛を取りやめ、また決定をインターンシップ受け入れ園全てに了承を得ることにした。その背景に、学生の中にはアルバイトを通して自分自身で学費や生活費を捻出している者もいる。そのため年間を通したアルバイトを含めた不要不急の外出の自粛をすることはインターンシップを履修できないことに繋がるケースがある。インターンシップを通して自身の成長を目的としている学生もいる中で、2021年度からはインターンシップに限り、この条件を取り下げたが、新型コロナウイルス感染防止対策に関する誓約書は引き続き、継続し、学生に周知と指導を行った。しかし新型コロナウイルスの猛威が再び訪れ、緊急事態宣言の発出に伴い、インターンシップ開始直前の4月下旬から本学では約1ヶ月間の休校をすることになり、インターンシップの開始が延期され、前期のインターンシップ日程が大幅に変更することになった。緊急事態宣言下でもインターンシップ生を受け入れる園や受け入れられない園など対応が分かれ、また2年生は6月に教育実習（幼稚園）が実施されたこともあり、履修学生の中で期間が分かれ、最短で3日間、最長で6日間のインターンシップとなった。

再度の緊急事態宣言の発出もあり、新型コロナウイルスの猛威は変わらない状況下であったが、ワクチン接種といった好転的な要素もあり、2021年度後期は週に1日のインターンシップを継続して実施することができた。また日誌もエピソード型の様式に学生が慣れ始め、考察を深められるようになった。また「NAGARAチャンネル」ではSkypeからZoomに形式を変更し、安定したネット環境の下、継続して学生がインターンシップの経験を共有することが可能になった。またこの「NAGARAチャンネル」には担当教員以外の教員も参加するようになり、保育専門分野に捉われない角度から保育について考えるようになった。

### 3 今年度（2022年度）の取り組み

2022年度はインターンシップの履修者数は両学年合わせて、188名中81名（約43％）、内2年生が100名中30名（約30％）、1年生の88名中51名（約58％）が履修し、行き先件数は42園となった。該当年度はコロナウイルスについては終息が見えない中ではあったが、各園・施設の協力の元、前後期合わせて20日間実施という感染拡大以前の日程に戻すことができた。また、以下に以前より取り組んでいる「NAGARAチャンネル」やエピソード記録、中間日を利用してのグループディスカッション等、インターンシップにおいての経験の振り返りや共有、日誌形態などの継続している内容の見直しとその変更部について記載する。

#### 【日誌】

2022年度前期については学生が毎回を漠然と過ごすのではなくねらいを持ち意識して子どもと保育者の関わりを観察したり、子どもと関わるように各回における「ねらい（該当項目がない場合は柔軟に対応が前提）」を設定する形で実施した。後期については項目をさらに精査し、前期のように各回指定ではなく設定した項目から学生が選択しエピソードでの記入形式に変更し実施した。

#### 【NAGARAチャンネル】

上記のように日誌において毎回の観点（ねらい）を指定（選択）制とすることで「NAGARAチャンネル」において共通のテーマを持つことができ、よりイメージや学びの共有にはつながっていると感じた。また、卒業後の学びの場の提供として2022年度より教員と学生のみでの取り組みではなく毎週1名現職の保育者（主に卒業生）をゲストスピーカーとして招くこととした。

#### 【グループディスカッション】

昨年度まで実施していた中間日でのグループディスカッションは継続しているが、共通のテーマを持ちより豊かな議論が行われ、学びの共有がスムーズにできるよう事前にアンケートを以下の内容で実施した。

- ①「保育者は凄いと感じたこと」についてできるだけ詳細に教えてください。
- ②「今悩んでいること」についてできるだけ詳細に教えてください。
- ③「今更聞けないこと」についてできるだけ詳細に教えてください。
- ④NAGARAチャンネルで、今後聞きたいこと、もしくは、参考になったことを教えてください。

### 【その他】

- ①加えて、2022年度からは学びの実感・可視化を目的とした社会人基礎力チェックリストを作成し、前後期のインターンシップ開始前に専門的な知識や技術とは別に保育者として一人の社会人として必要な素養面の重要性を意識できる取り組みを実施した。
- ②後期インターンシップ最終回（1月）に実際に子どもの前に立つ機会を園側に依頼した。その準備については1・2年生混合でのグループを構成し互いに発表・講評し合うという形で実施した。
- ③これまでインターンシップは授業開講期間の関係から1年半ばかりが最終となっていたが、目的は1年間継続した園での実体験とその積み重ねである。2022年度は規定の日程終了後、希望者を募り3月のインターンシップを園側に依頼する予定。

## Ⅳ アンケート調査について

本研究のアンケート調査の目的として、インターンシップの経験が学生にとって、より良い教育的効果が見られるものであることを明らかにするために実施するものとするため、本校の学生を対象にアンケート調査を行う。

### 1 アンケート実施時期と対象者

本論で参照するアンケート調査は、2021・2022年度入学者の1・2年生時の時点に行った調査を参照にしている。尚、今回の調査目的としてはインターンシップの教育的効果を可視化することとし、インターンシップの実施有無に関わらず、学年全体の学生に対して実施している。結果として、考察対象者は185名中117名が回答（78.3％）。2021年度入学生99名中71名（71.7％）、2022年度入学生86名中46名（53.4％）となっている。

### 2 アンケートの質問項目

【A】これまでの実習において学ぶことが出来たと思う上位3つ

- ①子どもの関わり方
- ②保護者の関わり方
- ③子どもの発達理解
- ④園・施設の一日の流れ
- ⑤保育現場の経験・理解
- ⑥子どもや保育者と接する・触れ合う
- ⑦保育内容についての引き出し
- ⑧授業とのつながり
- ⑨自分の社会人としての適性

【B】先生（保育士・幼稚園教諭・保育教諭を含む）や保育業務に対する意欲について（５段階評価）

- ・実習前に比べて「先生（保育士・幼稚園教諭・保育教諭含む）」になりたい意欲
- ・実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった
- ・実習中に「自分のなりたい先生像（保育士・幼稚園教諭・保教諭含む）」を見つけることができた
- ・実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった
- ・実習前に比べて日誌や目標・ねらいを立て振り返る等、保育者の諸業務の重要性を実感した
- ・実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた
- ・実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった
- ・実習前に比べて授業に向かう意欲が高まった

## V 調査の結果と考察 ～インターンを履修の有無での違いに着目して～

前述した通り本学では、インターンシップと表現関連科目（音楽表現、造形表現など）のどちらかを選択で履修をしている。以下、インターンシップを選択した学生をインターン選択、表現関連科目を選択した学生を表現選択と呼ぶ。

アンケート調査の相関関係の結果について以下に示す。

全117件中の学年割合は図1、選択科目については、図2に示す。

図1の通り、2年学生数（2021年入学者）が60.7%。1年学生数（2022年入学者）が39.3%と2年の学生回答数が大きく上回る。また図2の授業の履修者数でみると、インターン選択が43.6%、表現選択が56.4%である。本稿の分析において、学年による回答数差があることと履修科目の差があることを考慮し、検討することとする。図3～10は、実施した結果を示す。

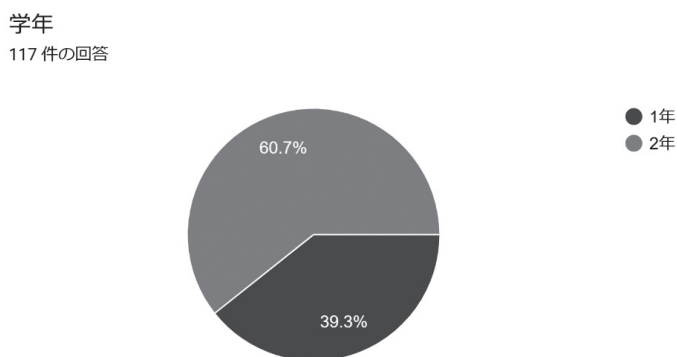


図1 回答数 学年内訳

### 水曜日の授業の履修について

117 件の回答

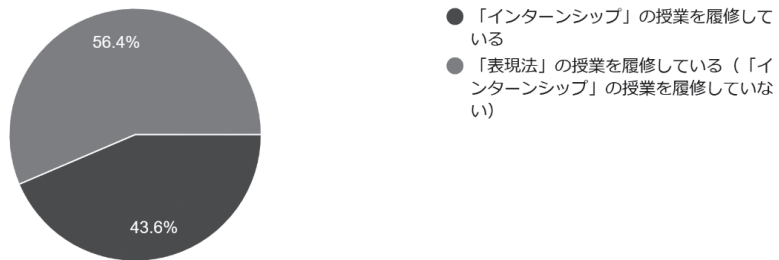


図2 選択科目について

実習前に比べて「先生(保育士・幼稚園教諭・保育...になりたい意欲の変化を5段階で応えてください。

117 件の回答

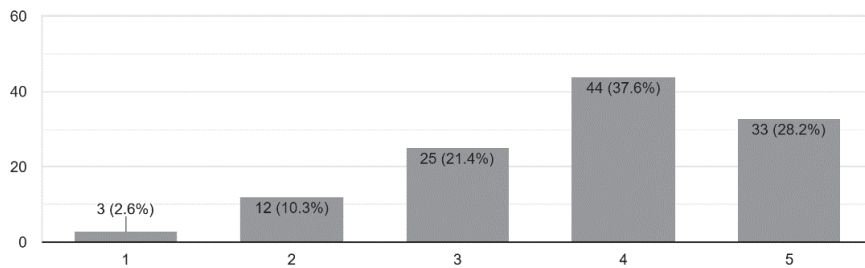


図3 実習前に比べて「先生（保育士・幼稚園教諭・保育教諭含む）」になりたい意欲の変化を5段階で応えてください。

実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった

117 件の回答

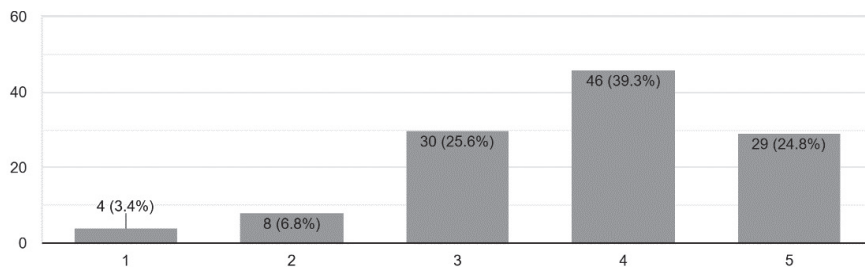


図4 実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった



実習中に「自分のなりたい先生像(保育士・幼稚園教諭・保教諭含む)」を見つけることができた  
117件の回答

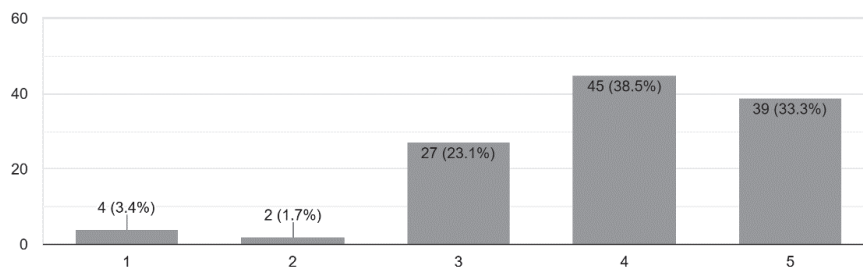


図5 実習中に「自分のなりたい先生像(保育士・幼稚園教諭・保教諭含む)」を見つけることができた

実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった  
117件の回答

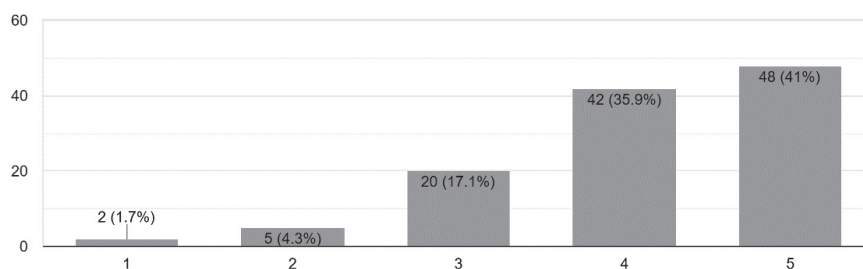


図6 実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった

実習前に比べて日誌や目標・ねらいを立て振り返る等、保育者の諸業務の重要性を実感した  
117件の回答

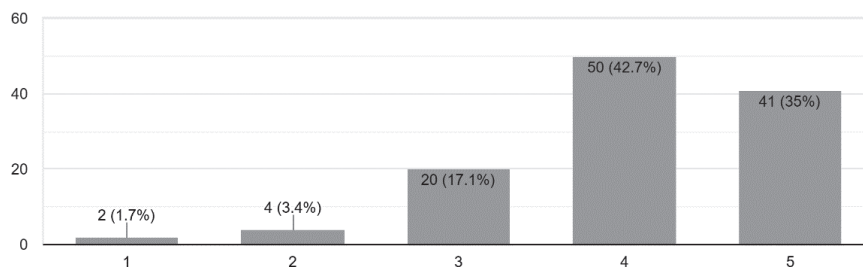


図7 実習前に比べて日誌や目標・ねらいを立て振り返る等、保育者の諸業務の重要性を実感した

実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた  
117件の回答

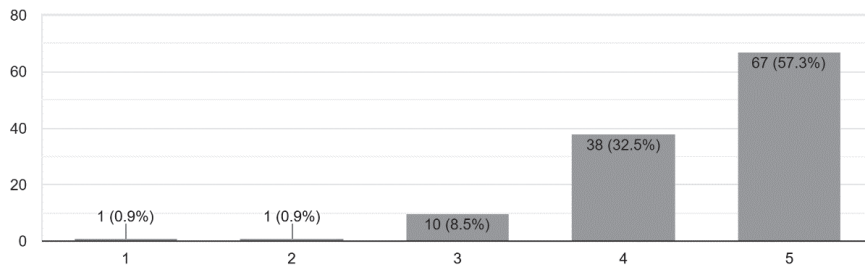


図8 実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた

実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった  
117件の回答

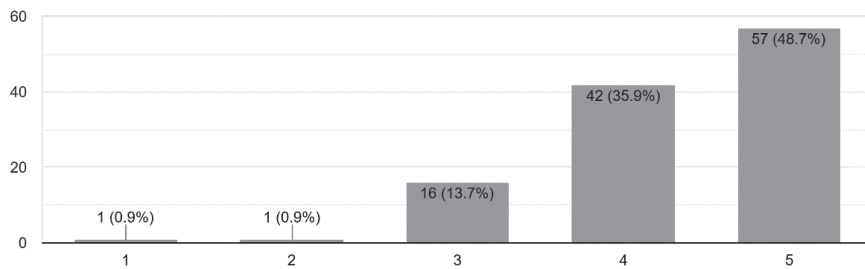


図9 実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった

実習前に比べて授業に向かう意欲が高まった  
117件の回答

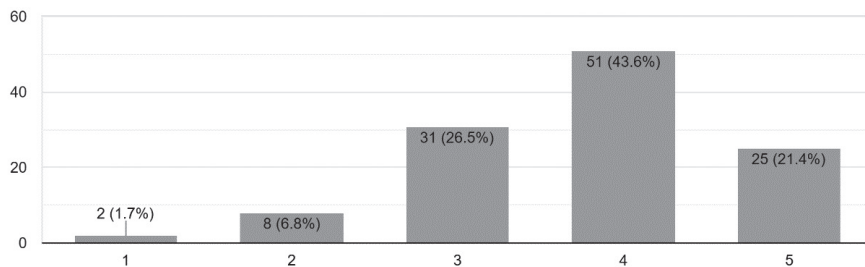


図10 実習前に比べて授業に向かう意欲が高まった

図3～図10は、各質問項目での5段階評価（1：全く思わない～5：とても思う）の結果である。評価として「5」が最も多く回答したものは、「図6 実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった」「図8 実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた」「図9 実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった」の3項目であった。その他は全て「4」の回答が最も多い結果となっている。実習前に比べると一定数の学生の意識や意欲が高まっていることが推測される。しかし、その一方でどの項目においても「1」「2」の回答も少なくない。特に「図4 実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった」では、12名（10.2%）と全体の1割の学生が「1」「2」と回答しており、実習前にあった保育者への憧れの気持ちが実習を経験することにより薄れていることが推測される。では、教育的効果があったかについて、アンケート調査を基に検討していく。表1～表10で「保育者になりたい意欲」「授業に向かう意欲」と他項目

表1 （インターン選択）保育者になりたい意欲の変化と他項目の相関関係

（インターン選択）保育者になりたい意欲の変化と他項目の相関関係	相関係数
実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった	0.68
実習中に「自分のなりたい先生像（保育士・幼稚園教諭・保教諭含む）」を見つけることができた	0.06
実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった	0.76
実習前に比べて日誌や目標・ねらいを立て振り返る等、保育者の諸業務の重要性を実感した	0.27
実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた	0.36
実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった	0.33
実習前に比べて授業に向かう意欲が高まった	0.43

表2 （表現選択）保育者になりたい意欲の変化と他項目の相関関係

（表現選択）保育者になりたい意欲の変化と他項目の相関関係	相関係数
実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった	0.82
実習中に「自分のなりたい先生像（保育士・幼稚園教諭・保教諭含む）」を見つけることができた	0.55
実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった	0.72
実習前に比べて日誌や目標・ねらいを立て振り返る等、保育者の諸業務の重要性を実感した	0.50
実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた	0.49
実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった	0.50
実習前に比べて授業に向かう意欲が高まった	0.64

との相関関係を示す。インターン選択・表現選択の学生によって違いはあるのかを検討していく。尚、各項目は全て実習へ行く前に比べてどう意識が変化したかという点を質問している。

表1・表2はインターン選択/表現選択それぞれの保育者になりたい意欲の変化と他項目の相関関係である。相関係数が0～0.2はほとんど相関がなく、0.2～0.4は弱い相関がある、0.4～0.7は相関がある、0.7～1.0は強い相関がある。「実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった」の項目については、インターン選択・表現選択のどちらにも0.7以上の相関があった。インターンシップを選択している学生よりも表現選択をしている学生の方が数値上では、強い相関があった。さら

表3 (インターン選択) 授業の意欲と他項目の相関関係

(インターン選択) 授業の意欲と他項目の相関関係	相関係数
実習前に比べて授業に向かう意欲が高まった	1.00
実習前に比べて「先生（保育士・幼稚園教諭・保育教諭含む）」になりたい意欲の変化を5段階で応えてください。	0.43
実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった	0.46
実習中に「自分のなりたい先生像（保育士・幼稚園教諭・保教諭含む）」を見つけることができた	0.27
実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった	0.42
実習前に比べて日誌や目標・ねらいを立て振り返る等、保育者の諸業務の重要性を実感した	0.55
実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた	0.37
実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった	0.41

表4 (表現選択) 授業の意欲と他項目の相関関係

(表現選択) 授業の意欲と他項目の相関関係	相関係数
実習前に比べて授業に向かう意欲が高まった	1.00
実習前に比べて「先生（保育士・幼稚園教諭・保育教諭含む）」になりたい意欲の変化を5段階で応えてください。	0.71
実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった	0.65
実習中に「自分のなりたい先生像（保育士・幼稚園教諭・保教諭含む）」を見つけることができた	0.66
実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった	0.66
実習前に比べて日誌や目標・ねらいを立て振り返る等、保育者の諸業務の重要性を実感した	0.66
実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた	0.63
実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった	0.73

に表現選択の表2では、「先生への憧れの気持ちが強くなった」という項目でも0.82と強い相関があったといえる。表現選択の学生よりもインターンシップ学生の方がより強い相関関係がみられるのではないかという仮定とは違った結果となった。

表3・表4はインターン選択/表現選択それぞれの授業意欲と他項目の相関関係である。表現選択のみ「実習前に比べて「先生（保育士・幼稚園教諭・保育教諭含む）」になりたい意欲の変化を5段階で応えてください」と「実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく

表5 （インターン選択/表現選択）実習において学ぶことができた

実習において学ぶことが出来た項目	インターン選択	表現選択
①子どもの関わり方	92%	95%
②保護者の関わり方	8 %	9 %
③子どもの発達理解	49%	56%
④園・施設の一日の流れ	53%	61%
⑤保育現場の経験・理解	31%	32%
⑥子どもや保育者と接する・触れ合う	35%	29%
⑦保育内容についての引き出し	22%	9 %
⑧授業とのつながり	4 %	2 %
⑨自分の社会人としての適性	6 %	2 %

表6 （インターン選択/表現選択）実習において学ぶことができた（学年別）

2022年度入学生（1年）		
実習において学ぶことが出来た項目	インターン選択	表現選択
①子どもの関わり方	96%	95%
②保護者の関わり方	4 %	0 %
③子どもの発達理解	37%	58%
④園・施設の一日の流れ	70%	74%
⑤保育現場の経験・理解	22%	26%
⑥子どもや保育者と接する・触れ合う	33%	26%
⑦保育内容についての引き出し	22%	5 %
⑧授業とのつながり	7 %	5 %
⑨自分の社会人としての適性	7 %	0 %



意識が高まった」の2項目で0.7以上の相関があった。こちらの表でも表現選択の学生よりもインターンシップ学生の方がより強い相関関係がみられるのではないかという仮定とは違った結果となった。

次に表5～表7は、実習において学ぶことができたと感じる項目（3つ）を選択したものの比較である。表5の「①子どもの関わり方」を選択している学生（全体）はほとんどで、インターン選択の学生が92％に対して、表現選択の学生は95％である。しかし、表7（2年生のみ）の同様項目

表7 （インターン選択/表現選択）実習において学ぶことができた（学年別）

2021年度入学生（2年）		
実習において学ぶことが出来た項目	インターン選択	表現選択
①子どもの関わり方	88%	96%
②保護者の関わり方	13%	13%
③子どもの発達理解	63%	55%
④園・施設の一日の流れ	33%	55%
⑤保育現場の経験・理解	42%	34%
⑥子どもや保育者と接する・触れ合う	38%	30%
⑦保育内容についての引き出し	21%	11%
⑧授業とのつながり	0%	0%
⑨自分の社会人としての適性	4%	2%

表8 （インターン選択/表現選択）平均値の比較

	インターン選択	表現選択
実習前に比べて「先生（保育士・幼稚園教諭・保育教諭含む）」になりたい意欲の変化を5段階で教えてください。	4.0	3.6
実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった	4.0	3.6
実習中に「自分のなりたい先生像（保育士・幼稚園教諭・保教諭含む）」を見つけることができた	4.0	3.9
実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった	4.2	4.0
実習前に比べて日誌や目標・ねらいを立て振り返る等、保育者の諸業務の重要性を実感した	4.2	3.9
実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた	4.5	4.4
実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった	4.4	4.2
実習前に比べて授業に向かう意欲が高まった	3.7	3.8

の値では、インターン選択の学生が88％に対して、表現選択の学生は96％と約10％の差が見られた。また、ほとんどの学生が回答している「①子どもの関わり方」と選択していない学生は、どういった意図で選択をしなかったのか疑問が残る。この疑問については、アンケート調査だけでは見えてこなかった為、さらに学生へのインタビューで詳細を検討していく。

次に表8～10は（インターン選択/表現選択）平均値の比較である。表8のインターン選択学生をみていくと、ほとんどが表現選択の学生に比べて平均値が高いことを示している。ここからインター

表9 （インターン選択/表現選択）実習において学ぶことができた（学年別）

2022年度入学生（1年）	インターン選択	表現選択
実習前に比べて「先生（保育士・幼稚園教諭・保育教諭含む）」になりたい意欲の変化を5段階で応えてください。	4.0	3.7
実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった	4.2	3.7
実習中に「自分のなりたい先生像（保育士・幼稚園教諭・保教諭含む）」を見つけることができた	3.8	3.8
実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった	4.4	4.2
実習前に比べて日誌や目標・ねらいを立て振り返る等、保育者の諸業務の重要性を実感した	4.1	3.8
実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた	4.6	4.2
実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった	4.3	4.1
実習前に比べて授業に向かう意欲が高まった	3.7	3.9

表10 （インターン選択/表現選択）実習において学ぶことができた（学年別）

2021年度入学生（2年）	インターン選択	表現選択
実習前に比べて「先生（保育士・幼稚園教諭・保育教諭含む）」になりたい意欲の変化を5段階で応えてください。	4.0	3.6
実習前に比べて先生への憧れの気持ちが強くなった	3.8	3.5
実習中に「自分のなりたい先生像（保育士・幼稚園教諭・保教諭含む）」を見つけることができた	4.3	4.0
実習前に比べて子どもとさらに関わりたい意欲が高まった	4.1	3.9
実習前に比べて日誌や目標・ねらいを立て振り返る等、保育者の諸業務の重要性を実感した	4.4	4.0
実習前に比べてコミュニケーション能力の必要性を感じた	4.5	4.4
実習前に比べて社会人としてのマナーやふるまいを身につけていく意識が高まった	4.5	4.3
実習前に比べて授業に向かう意欲が高まった	3.8	3.7

ンシップに参加することにより、学外実習の参加でより学べるがあったと感じている学生が平均的には多いことが考えられる。また実習前に比べて「先生（保育士・幼稚園教諭・保育教諭含む）」になりたい意欲の変化を5段階で考える」と「先生への憧れの気持ちが強くなった」という両項目では、インターン選択4.0/表現選択3.6と、インターンシップを選択している学生の方が先生になりたい意欲では0.4%高い結果となった。

表1～10の表について検討・考察した課題をまとめると、以下があげられる。

- ・インターンシップ選択学生の方が表現選択の学生よりも強い相関関係がみられるのではないかと  
いう仮定とは違い、教育的効果との因果関係までは読み取れなかった。
- ・保育者になりたい意欲・授業に向かう意欲と他項目との相関関係は今回のアンケート調査からは  
あまり見られなかった。
- ・実習の中で学ぶことができたと感じる3項目を選択する中で「①子どもの関わり方」を選択して  
いる学生（全体）はほとんどである。（インターン選択の学生92%/表現選択の学生は95%）ほ  
とんどの学生が回答している「①子どもの関わり方」と選択していない学生は、こういった意図  
で選択をしなかったのか疑問が残る。
- ・平均値をみていくと、インターン選択学生と表現選択の学生で差が見られ、特に「①子どもの関  
わり方」の項目ではインターン選択の学生が92%に対して、表現選択の学生は95%である。
- ・インターンシップに参加していることにより、学外実習の参加でより学べるがあったと感じ  
ている学生が平均的には多い。

この結果を踏まえて、今回のアンケート調査の項目で「（インターン選択/表現選択）実習におい  
て学ぶことができた（学年別）」項目選択の中で、ほとんどの学生が選択していた①子どもの関わ  
り方を選択していない学生へ、以下3点についてインタビューを行った。（インターン選択・表現  
選択の（2021年度入学 2年生）両学生へ同様の質問を行った。）

- ・実習において学ぶことができた3項目をどのようにして選択したか
- ・実践（学外実習・インターンシップを含め）と授業とのつながりを感じることはあったか？
- ・子どもの関わり方を選択していない理由はなぜか

#### 【インターン選択の学生（2021年度入学 2年生）の場合】

・実習において学ぶことができた3項目をどのようにして選択したか

（選択項目③子どもの発達理解⑤保育現場の経験・理解⑥子どもや保育者と接する・触れ合う）

実際は、消去法だった。実習は大体の年齢における発達・成長が分かったが、インターンシ  
ップではその子自身の成長が理解できた感じだった。友達関係などの人間関係もよくみえるのはやっ  
ぱり1年間行っているインターンシップだった。⑤保育現場の経験・理解はインターンシップよ  
りも実習の方は子どもが帰った後の事を学べた。（インターンシップは、15時で終了。）

特に初めての教育実習での幼稚園の時とかは結構制作とか運動会の準備とかも先生の業務もやらせてもらった。最初の実習で先生ってこういう仕事もあるんだということが印象的。

⑥子どもや保育者と接する・触れ合うでは、実習でもインターンシップでもたくさんあったけど、インターンシップは1年間いくことで、行きはじめと終わりの子どもの様子を比較できたことはよかった。

・実践と授業とのつながりを感じることはあったか？

3歳時で仲間意識が出てきたときの事例の話が授業であって、そのちょうど1週間前ぐらいにインターンシップに行ったできごとが重なってなるほどという理解につながった。ピンとくるそういう機会って結構ある。

・子どもの関わり方を選択していないのはなぜか

子どもとの関わりという点では、妹や妹の友だちと関わる事が多く短大入学前から自分の中で子どもと関わることは慣れている部分が大きかった。だから改めて選ぶことはしなかった。

#### 【表現選択の学生（2021年度入学 2年生）の場合】

・実習において学ぶことができた3項目をどのようにして選択したか

（選択項目④園・施設の一日の流れ⑤保育現場の経験・理解⑥子どもや保育者と接する・触れ合う）

他の項目も迷いましたが、特に印象深かったものを選びました。実習前に比べてこの3つの項目を実習の中で感じる機会や触れ合うことが多かったと思います。④の園・施設の一日の流れについては、二週目になってきたら大体覚えて先生にも聞くけれど、何となく自分で考えて動けることが増えていった。実習毎でその都度経験を重ねることによって、慣れてくる雰囲気は自分の中でも分かってきた。実習の回数を重ねることで、慣れることが増えていった感じです。⑤保育現場の経験・理解と⑥子どもや保育者と接する・触れ合うについては、私自身、子どもたち自身が考えることを好きのようにさせてあげたいタイプで、でも印象深かった経験として、保育園やたけど結構きっちりしている指導の多い園でした。運動会前の時期に実習していたので、その練習が多く、先生の子どもへの伝え方で戸惑うこともありました。けれど、日を追うごとにその先生のいろんな面を見ることができて、すごく子どもたちのことを好きという気持ちが伝わってきた。それは子どもたちの運動会の練習だけじゃなく、日々の保育の中で関わっている子どもと先生を見ていたら、すごく愛情があって、子どもたちができると言ってる言葉・怪我したら危ないから言い方も少しきつくなることもあることが分かりました。子どもたちへ伝えていく先生の意図があるからこそ、そういう声かけするのだろうなということに気づかされました。

・実践と授業とのつながりを感じることはあったか？

正直、授業を受けているよりも現場で動いているときの方が学びは多いと感じることは多かった。動いてみないとわからないと思うから。けれど、インターンシップに毎週行くことは簡単なことじゃないと思う。授業は学校に行って、慣れている環境。学校での授業内でも保育の現場ですのようなことを実践にうつすことはあるけれど、現場で動いている時の方が勉強しているなとは思った。

・子どもの関わり方を選択していないのはなぜか

そもそも子どもの関わり方を学びとは捉えていない感じですが。子どもと関わる中で自然に理解していく感じなので、気付いたら出来るようになっていく感覚かなと思います。だからわざわざ選ばなかったと思います。

表11から以下の考察・検討点があげられる。

- ・実践の中で授業の学びを学生が感じている機会はあるが、それが授業への意欲に繋がっていない部分も多い。
- ・授業の中の学生の学びが実践の場で生かしきれていないのではないかな。
- ・インターンシップ学生において、実習と比較をしながら学びを実感できている部分もある。さらに実習での学びとインターンシップの学びが互いに活かされているともいえる。
- ・インターンシップの経験が学生の成長実感や他授業・保育者にさらになりたいという意欲に直接的に繋がっているとは言い切れない。
- ・インターンシップにかかわらず学外への実習の中で経験したことが、授業とのつながりを感じる場面はある。

今回、学生から聞いたインタビューに関しては、インターン選択の学生/表現選択の学生全般を示すものではない点を考慮しておきたい。

表11 学生へのインタビュー 抜粋からの考察

	インターン選択の学生	表現選択の学生
①授業へ向かう意欲が他項目に比べて低いこと（中央値4、平均3.76）について	1週間前ぐらいにインターンシップに行ったできごとが重なっていた	授業を受けているよりも現場で動いているときの方が学びは多いと感じることは多かった
②学外実習・インターンシップでそれぞれ学べた事柄について	実習は大体の年齢における発達・成長が分かったが、インターンシップではその子自身の成長が理解できた	実習の回数を重ねることで、自分で考えて動けることや慣れることが増えていった
③子どもの関わり方を選ばなかったことについて	短大入学前から自分の中で子どもと関わることは慣れている部分が大きかった	子どもとの関わり方は、自然に理解していくという認識で、学びとは捉えていない



## Ⅵ おわりに ～今後の考察と課題～

本論文の目的はインターンシップの授業を含めた経験値が学生の学習意欲を高めているか、その教育的効果について検討することであった。研究方法としてはアンケート調査・インタビューを用いて研究を行い、その結果、以下の3点の仮定を考察した。

### 【仮定】

#### ①インターンシップの準備期間の取り組みが学習意欲に影響しているのではないか？

(教員間での検討から)

年度を追うごとに授業形態の改善は試みているが、直接的な教育的効果があるとは認められない。ただ、改善の中で学生のモチベーションの違いは出ているのではないかと予想した。準備期間が少ないのではないかという課題に対し、現場経験の中での課題発見が必要であるため、インターンシップ前の準備授業よりもインターンシップ継続中での授業内での振り返りが必要であることがこれまでのインターンシップ授業の整理を行うことで分かった。また、日誌によって個別の学びはあっても、集団での共有機会がないため、年間スケジュールの見直しを行い、見通しをもった授業進行・展開が必要である。

#### ②学生のニーズに合った学び（学生の期待（学びたい）とのギャップ）

(学生へのアンケート・インタビュー調査から)

学生のほとんどが子どもとの関わりを学べていると実感していることがアンケートから分かった。一方で子どもとの関わりは元々理解しているものと認識し、学生自身の育ちの中で子どもと関わる経験が多く、「学び」とは捉えていないという考えも一部で聞かれた。教員が思う学びと学生が望むもののマッチングが合っていない可能性もインタビューから示唆された。学生が何を期待してインターンシップや実習に望んでいるかについてさらに調査し、学びの場を提供することが急務である。

#### ③インターンシップの経験を踏まえて授業との繋がりを意識できているのか

インターンシップを含めた学外実習での学びを実感するのは、インターンシップを選択した学生に限らず、表現を選択した学生も機会が多くあることがインタビューより聞くことが出来た。しかし、その学びが授業との往還的な学びに繋がる機会が少ないことが分かった。インターンシップを選択した学生の中には、授業内でインターンシップでの出来事と講義内容とのつながりを感じたとの回答もあった。しかし、全体の学生から聞かれた訳ではないため、一概には言えない。

今回のアンケート調査・インタビューを基に考察すると、学生の実感としてインターン実施・未実施学生で学習意欲についての差異はそれほど見られなかった。今回実施したアンケートを再考し、学生の本意をさらに探っていきたい。また、学生自身の成長実感や学びの過程をどのように可視化していくかも課題である。本研究の残された課題と今後の発展について以下に示す。

まずは、より有効的な学生のインターンシップ実習の充実（循環的な学び）が必要である。そのためにインターンシップの質の向上、日誌、インターンシップ実習終了後のオンラインでの振り返

り授業の見直しが必要である。インターンシップ実習終了後のオンラインでの振り返り授業では学生がどのように捉えているのか、その必要性をどのように感じているかについての学生アンケートを今後実施していきたい。次に実習とインターンシップの学びの違いについて学生に提示することが重要である。インターンシップ実習を経験することで、成長が実感できる仕組み作りを検討していきたい。現在行っているコロナ後から始めた日誌の添削については、学生の学びにつながっているか、どのように影響しているかの検討が必要である。そのためには、教員側の実習指導の為の研修プログラムも今後の課題としておきたい。最後にインターンシップ実習継続中に学びを共有する場を設けることである。インターンシップ実習が始まると、日誌を大学教員が添削し振り返っているが、個人対個人での振り返りにとどまっている。そのため、実施学生同士での共有の場が設けられていないことが課題である。インターンシップ生の学びを可視化・実感する機会を増やしていく試みが必要であろう。以上の点を踏まえた上で、今後さらにインターンシップの授業を含めた経験値が教育的効果を高められるよう、追及していきたい。

## 【引用・参考文献】

- 1 佐伯知子「長期的インターンシップ実習における継続性/非継続性の要因に関する研究－保育・教育系学生の縦断的アンケート調査を手がかりに－」『大阪総合保育大学紀要第8号』（2015）  
[https://jonan.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=17&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=37](https://jonan.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=17&item_no=1&page_id=13&block_id=37)（参照 2022-12-01）
- 2 下里里枝、谷口一也「就学前保育・教育施設へのインターンシップの効果と課題(2)大学1年生のインターンシップの場合」『関西国際大学教育総合研究叢書第11号』（2018）  
[https://kuins.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=565&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=17](https://kuins.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=565&item_no=1&page_id=13&block_id=17)（参照 2022-12-01）
- 3 山本弥栄子「保育者養成課程におけるインターンシップの意識変容に関する研究－保育所実習における意識変化の段階仮説－」『桃山学院教育大学研究紀要第2号』（2020）  
[https://momokyo.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=111&item\\_no=1&attribute\\_id=22&file\\_no=1](https://momokyo.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=111&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1)（参照 2022-12-01）
- 4 平井敏孝、伊藤孝子、藤山あやか「保育士・教育養成段階におけるキャリア形成支援－インターンシップの効果的な実施方法を探る－」『滋賀文教短期大学紀要第22号』（2020）  
[https://s-bunkyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=64&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://s-bunkyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=64&item_no=1&page_id=13&block_id=21)（参照 2022-12-01）
- 5 大嶋健吾、玉川朝子、芝田圭一郎「コロナ禍における学生の保育現場経験値共有の為の取り組み」『日本乳幼児教育・保育者養成学会 第2回研究発表』（2021）

Educational Effectiveness of Year-Round Internships  
: Current Status and Issues

Kengo Oshima, Keiichiro Shibata  
Tomoko Tamagawa, Koichiro Nakatsu

[Abstract]

The purpose of this study is to examine and analyze the educational effects of internship experiences. Our university is one of the few childcare training institutions that offer internship programs one day a week throughout the year. Since Osaka Comprehensive Childcare University is the only one that has introduced a similar format, there are few articles that can be compared as prior research. Therefore, after organizing the internship approach, we conducted a questionnaire survey and interviews with students. A close examination of the internship classes to date reveals that although students have learned individually through their journals, they have not had the opportunity to share their learning with the group, and therefore, it is necessary to review the annual schedule and develop a class progression and development with a clear outlook. In addition, based on the questionnaire survey and interviews, there was no significant difference in the students' motivation to learn between those who had done internships and those who had not done internships. There is an urgent need to further investigate what students expect from internships and practical training, and to provide them with opportunities to learn. In the future, we would like to further explore students' true intentions by reconsidering and implementing the questionnaire. Another issue is how to visualize the students' own sense of growth and learning process.

(おおしま けんご：教授)

(しばた けいいちろう：神戸教育短期大学 准教授)

(たまがわ ともこ：講師)

(なかつ こういちろう：教授)